

イングランド・スコットランド合邦にかんする考察（二）

松 園 伸

目 次

- 一 考察の出発点
- 二 イングランド国内政治と合邦への道
- 三 合邦条約交渉―スコットランド代表議員の議員数決定を中心にして―（以上前号）
- 四 合邦条約批准と第一回代表貴族選挙（以下本号）
- 五 第二回代表貴族選挙
- 六 おわりに

四 合邦条約批准と第一回代表貴族選挙

前号で述べたように、イングランド・スコットランド合邦条約の草案は両王国の委員によって一七〇六年に起草された。そしてこの草案の第二十二条でスコットランド議会がイングランド議会に「吸収」されることが明記されたの

である。上院（貴族院）代表一六名、下院（庶民院）代表四五名という数字にスコットランド側の委員は大いに不満であつたけれども、經濟力に優るイングランド側はついにスコットランド側の譲歩を引き出した。ただしここで注意しなければならないのは、一七〇六年の合意はあくまでも条約案についてであるという事實なのである。もちろん両王国の委員はそれぞれの議會から合邦条約交渉を進めるための権限を与えられていた。しかし条約は両國議會の批准・承認があつて初めて本条約となりえたのである。本号においてはまずこの条約批准の過程を考察することにしよう。とりわけ重要なのは第二十二条である。その理由としては、イングランド・スコットランド両議會の統合というきわめて歴史的意義の大きい事件が、これまであまりにも史家によつて輕視されてきたことが挙げられよう。異なつた歴史・伝統・文化をもつ二つの民族が、たとえ多くの障害にみまわれながらも一つの統一された政治的共同体へと平和的に融合していく過程は現代に生きる私たちにとつても種々の示唆を与えてくれるはずである。

合邦条約案の審議はまずスコットランド議會で一七〇七年初頭に始まつた。批准・承認は慎重を期すために各条項について一つ一つ採決が行われたのである。そして第二十二条については一月上旬に激論が交わされ、ついにスコットランド宮廷勢力は、ハミルトン派などの反合邦派を圧倒し、二つの議會の合同を認めたのであつた。第二十二条をめぐる論議の中でもとくに重要なのは上院代表貴族の選出の手續である。一七〇六年に作成された条約案では専ら何名の貴族をウエストミンスターに派遣しうかが焦点になつた。しかし、両王国の合邦交渉委員は一六名の代表貴族の選出手続については意圖的に条約案に盛りこむことを避けたのであつた。イングランド代表委員の関心事は専ら統一された新議會におけるスコットランド議員を何名に抑えこむかにあつたのであり、どのような方法で一六名を選ぶかについてはいわば「先送り」することで満足したのである。したがつて、こうした選出手続が議論の俎上にのつたの

は、一七〇七年初頭のスコットランド議会在始めてであった。

一七〇七年に入ってもハミルトン派は合邦条約全体について反対していたとみられる。その一方でハミルトン派は、クイーンズベリ派、アーガイル派、スクアドロン派からなる合邦推進三派連合が固い結束を保っている間は合邦条約の成立は時間の問題であることを認めざるを得なかったのである。したがってハミルトン派は合邦条約そのものの否決のために全力を注ぐ一方で、かりに条約が成立したとしても、なおも政界に影響を保持し得るように徐々に戦術を転換したのであった。この戦術の変化は第二十二条の審議についても明らかに看取することができる。ハミルトン派は二つの議会の統一に依然として反対し続けた。そしてスコットランド貴族のうち一六名のみが統一議会において議席を占めるという条約案は、スコットランド貴族の古来の特権を蹂躪するものとみなしたのである。その一方ハミルトン派はスコットランド代表貴族の選出方法を自派に有利に規定することで、合邦条約成立によるダメージを最小限に抑えようとしたのであった。すなわちハミルトン派は、代表貴族を選挙ではなく輪番制によって選出しようとした^①。当時のスコットランド議会においてハミルトン派とそのシンパは四分の一ないしは三分の一に達していたと考えられる。したがって輪番制が認められれば、ハミルトン公の勢力は通例四、五名の貴族を送れるはずであった。他方クイーンズベリを中心とする三派連合は数の上ではハミルトン派を圧倒しながら、一六名の議席を独占することは事実上不可能になるのである。

輪番制が自派にとつて不利であることをクイーンズベリ公らは直ちに理解した。輪番制を三派連合は政治的に有能な者もそうでない者も同様に選出するものとして反対した。しかし、スコットランドにおける三派連合以上に輪番制の導入に否定的だったのは大蔵卿ゴドルフィン伯を中心とするイングランド宮廷勢力であった。ゴドルフィンにとつ

て一六名の代表は伯の忠実な下僕以外の何者でもなかったのである。伯はかれのもつ官職叙任権パトロネージをフルに活用することと三派連合を中心とする合邦賛成派を厚く保護する一方、ハミルトン派のスコットランド議院内での孤立化に全力を注いだのであった^②。ただし三派連合の側も決して「一枚岩」であつたわけではない。なるほどクイーンズベリー派、アーガイル派、スクアドロン派ではいずれも合邦条約案の批准・承認については合意が出来上つていたと考えられる。だが、アーガイル派は三派連合の中でもクイーンズベリー派のみがイングランド宮廷で重用されているのをみて不満をつのらせていた。またスクアドロン派はゴドルフィン伯がイングランド内のウィッグ勢力と行動を共にしている限りにおいて連邦支持の立場をとつていたに過ぎない。したがつてスクアドロン派は輪番制に反対し選挙による代表貴族選出を支持し、この点ではクイーンズベリー派と行動を共にしたけれども、合邦批准後ゴドルフィンとウィッグの關係が險悪化するにしたがつてゴドルフィンに対して公然と反旗を翻したのである。これらクイーンズベリー派・イングランド宮廷勢力対アーガイル派・スクアドロン派の反目については、イングランド議會における合邦条約の批准について考察したあとでもう一度取り上げることにしよう。

一七〇七年一月にスコットランド議會は合邦条約案を承認し、条約発効後に行われる上院一六名、下院四五名の代表選出はすべて選挙によつて決定されることとした。そして本条約案はイングランド議會に送付された。その中でも重要事項である第二十二条は二月末に審議されたのである。三派連合対ハミルトン派という対立図式は、イングランド議會ではゴドルフィン伯を中心とする宮廷勢力・ウィップ対トリーという形に置き換えられた。トリーは合邦に反対する理由を議會で展開した。まず、スコットランド議會が決定した一六名の代表貴族の選挙はイングランド上院の長い伝統に全くそぐわないとトリーは主張した。貴族が上院議員として議席を占めるのは貴族として当然の生得の権

利であり、これの否定は、たとえその他の貴族特権がスコットランド貴族すべてに認められるとしても、かれらの名声・威望を大きく傷つけるとトーリは考えたのである。ただし、ここで留意しなければならないのは、たとえトーリは選挙による代表貴族の選出に反対したとしても、スコットランド貴族すべてが（実際に出席するか否かは別として）統一されたグレート・ブリテン議会で議席を有するべきだとはトーリは決して主張しなかったということである。かれらが主張した代表選出の原則とは依然として地租負担の額に応じた代表数であり、ハミルトン派が提案した輪番制であつた。^④

トーリの意図は明らかであろう。一六名の代表貴族数は、当時のイングランド議会上院の議員が一七〇名ほどであつたことを考えれば決して泡沫勢力とはいえない。しかも高齢、病弱、政治的無関心のため、上院の出席者が一〇〇名を越えることはきわめて稀であつたことを考えれば、トーリが一六名の代表の参加を怖れたのには十分な理由がある。しかもこれらの議員が輪番制ではなく、スコットランド貴族の互選で決められるならば、一六名すべてが合邦賛成派の三派連合によつて占められることは明らかだったのである。

トーリが三派連合による議席独占を恐れたのは別の理由があつた。クイーンズベリー派はゴトルフィン伯の直系であり、ウエストミンスターでは伯の持駒として行動することが予想されていた。しかしトーリにとつてさらに脅威であつたのは、アーガイル派とスクアドロン派すなわち親長老派勢力である。かれらはイングランド内で長老派教会が弾圧されているのに不満であり、合邦実現ののちには、長老派への寛容を求めていた。この動きにただちに反発したのがトーリ右派、とりわけ高教会派に属する主教であつた。これら主教たちはイングランド人の民族感情を利用して、合邦は「水と油を混ぜようとするもの」という所論を展開した。そしてアーガイル派、スクアドロン派系の代表貴族は

イングランド伝統の国と国教会の紐帯を損なうとトリー右派は主張したのである。したがって高教会派主教は、たとえ合邦と代表貴族選挙が不可避であるとしても、代表貴族の議会内での権利を一部制限し、かれらの政治的影響力を低下させようとした。たとえばバス・アンド・ウェルズ主教（高教会派）は「国教会の利害にかかわる議題についてスコットランド代表貴族は採決に加わることができない」とする提案をしたのであった。

だが、こうした提案はスコットランド側が受け入れるはずもなく、非現実的であつたといえるだろう。高教会派・トリー右派の提案は宫廷勢力およびウィッグによつて一蹴され、しかもトリー右派の政策に失望したトリー穏健派も合邦賛成、代表貴族選挙支持に回つたため、合邦条約案は一七〇七年二月、圧倒的多数でイングランド議会で批准・承認され、翌三月に発効したのである。

二月にイングランド議会で条約案が通過したあと、残る問題は初の代表貴族選挙に絞られることになつた。スコットランドは、イングランドと異なり一八世紀初めでもなお氏族社会が残り、スコットランド貴族は経済的な影響力のみならず、精神的な影響力をも地域住民に及ぼしていたのである。したがって代表貴族選挙は下院代表選挙をも左右すると考えられた。合邦条約において中心的役割を果たした三派連合も、元はといえばそれぞれの派が異なつた氏族社会を形成してしたのであり、その関係は決して円満ではなかつたと言える。アーガイル派、スクアドロン派は合邦実現という共通目的が実現されたあと、次第にクイーンズベリ派、そしてゴドルフィンを軸とするイングランド宫廷勢力から離れていくのである。

既に一七〇七年一月の段階でスクアドロン派は、合邦実現後クイーンズベリ派およびゴドルフィン伯から距離をおき、イングランド内ウィッグに接近する腹を固めていたとみられる。スクアドロン派は一七〇七年初頭、ウィッグの

なかでも最左派のジャントゥと連絡を密にしていた。スクアドロン派は、ジャントゥに対し、ウィックが結束してゴドルフィン伯に圧力をかけ、できる限り多くのスクアドロン派貴族を選出すべく協力するように求めたのであった。^⑥

一方アーガイル派も同じころ、合邦条約成立を見越して自派勢力の結束を固める一方、クイーンズベリ派との協力関係を見直そうとしていた。アーガイル公は自らがイングリランド爵位を有していたので、専ら公の子飼いの勢力を代表貴族として選ぶように要求していたのである。^⑦

こうしたスクアドロン派、アーガイル派の行動から、三派連合が合邦後まもなく崩壊することが当時すでに予想されていた。しかし一七〇七年二月の時点では連合の崩壊はかろうじて回避することができたのである。その理由にはいくつか考えられるが、最大の要因がハミルトン派の存在であったのは疑いえない。合邦交渉および批准審議において一敗地にまみれたとはいえ、ハミルトン公派の勢力はあなどりがたいものであった。そのため、クイーンズベリ公とその側近は一度は一六名の代表貴族のうち少なくとも一名はハミルトン公自身にしなければならないと考えていた。しかしこの譲歩案を撤回させたのは、反合邦勢力を一名たりともウエストミンスターに送りこませまいとするゴドルフィン伯を中心とするイングリランド宮廷の強い意志だったのである。次に引用するマー伯爵（クイーンズベリ公の腹臣）の書簡はクイーンズベリ公およびゴドルフィン伯の考えをよく示している。^⑧

われわれの何名かはハミルトン公を「一六名の代表貴族の一人に」指名するのが望ましいと考えていた。というのは、ハミルトン公の配下がだれも指名されないとすれば、公はわれわれの中でのみに足らぬ存在となるからであり、さらにハミルトン公とかれの派閥の間を完全に分断するであろうからである。「中略」この案は十分理にかなって

いるようにみえた。ところが国王代理「クイーンズベリ公」はこの案がわれわれの上役「イングランド宫廷」に受け入れられないと述べたので、沙汰やみとなったのである。しかしなお、われわれはハミルトン公を排除しうるか否かについて確信をもてないのである。というのも、合邦成立についてわれわれと行動を共にした貴族のうちには、個人的にハミルトン公に敵対したくない者がいるからなのだ。

右の書簡はスコットランド内の合邦賛成派以上にイングランド宫廷がハミルトン公を怖れていたことを示している。そしてハミルトン公の排除のためには、三派連合の団結を保つことが必要だったのは言うまでもない。ゴドルフィン伯が採った方策はきわめて巧妙なものであった。代表貴族選挙直前にゴドルフィン伯とクイーンズベリ派は慎重に「宫廷側リスト」(Court List)といわれる候補者リストを作成し、自派議員にリストに載った貴族への投票を強制することで死票を少なくすることに成功したのである。「宫廷側リスト」はクイーンズベリ派の中でも公の側近であるマー伯爵やシーフィールド伯爵らごく少数の有力者が作成に携わったに過ぎない。候補者選びの過程でゴドルフィンの方針とクイーンズベリ派の考えとは完全に一致したわけではなかった。ゴドルフィン若年や政治的に無力な貴族を数名リストにのせるよう要求してきた。ゴドルフィンにとってスコットランド代表貴族とは伯の持駒に過ぎない以上、伯が有力者よりも政治的なディレクタントを好んだのは驚くにあたらないかもしれない。しかし、クイーンズベリ派はこうしたゴドルフィンの意図に反して、三派連合の中のそれぞれの派から有力者を登用する道を選び、連合が合邦実現後直ちに崩壊することのないように努めたのであった。

しかし大筋においてゴドルフィンとクイーンズベリ派の利害は一致していたと言ってよい。ゴドルフィンは「宫廷

側リスト」の作成にあたって、クイーンズベリ派だけを信頼し、アーガイル派やスクアドロン派と個別の取引は行なわなかったのである。したがってアーガイル派やスクアドロン派との交渉は専ら、クイーンズベリ公、マー伯、シーフィールド伯らの仕事となった。クイーンズベリ派は、アーガイル派に対して比較的利益な取扱いをしたとみられる。アーガイル派は三派連合の中では最小の勢力であつたにもかかわらず、二名を割りあてられた。これにイングランド世襲爵位をもつアーガイル公自身を含め三名が上院の議席をもつことになつたのである。アーガイル派が優遇された理由としては、公がアン女王の覚えがめでたいことがまず挙げられよう。またアーガイル派は宮廷が十分な官職や年金を与えている限りにおいて柔順な勢力であつたので、コドルフィンにとつても都合のよい存在だつたのである。

これにくらべてスクアドロン派へのクイーンズベリ公の態度ははるかに冷淡であつた。宮廷側リストの作成過程の中で折にふれてクイーンズベリ派はアーガイル派に意見を求めたとみられるが、スクアドロン派は三派連合の一角でありながら、いわば「つんぼ棧敷」に置かれていたのである。ゴドルフィンおよびクイーンズベリ派は、スクアドロン派の親ウィッグ的な政治姿勢をよく承知しており、ゴドルフィンとウィッグが敵対した場合、スクアドロン派はたぬらうことなくウィッグを選ぶと考えられていた。したがってクイーンズベリ派がスクアドロン派に宮廷側リストを提示したのは実に代表貴族選挙開始のわずか二時間前だつたのである。スクアドロン派はこの選挙で少なくとも六名の当選を見込んでいたが、スクアドロン派がクイーンズベリ公から受け取つたリストには、モントローズ公、ロクスバラ公、トゥイデール侯、サザランド伯の四人があるに過ぎなかつた。

このリストを見てスクアドロン派が激怒したのは驚くにあたらないであらう。だが、実際にはかれらの置かれた政治状況はそれほど単純ではなかつた。選挙開始二時間前という制約があつたにせよ、スクアドロン派が「野党リス

ト」を作成し、クイーンズベリ派と正面对決することは可能であつた。しかし、スクアドロン派がこの戦術を採つた場合、のリスクは明らかであろう。ゴドルフィン伯がクイーンズベリ派のみを信頼し、スコットランド人への官職と年金がクイーンズベリ派を通じて与えられる以上、スクアドロン派は榮達の道を閉ざされることが十分ありえたのである。また代表貴族選挙において三派連合の結束が崩れることは、取りもなおさずハミルトン派が漁夫の利を占めることを意味していた。したがつてスクアドロン派はあえてクイーンズベリ派との全面対決を避け、大筋において宮廷側リストに沿つた投票をしたと考えられる^⑪。

さて、三派連合がかりうじてその団結を維持しているとき、反合邦の急先峰ハミルトン派はいかなる動きに出たであらうか。ハミルトン公は、イングランド宮廷の厚い信を得たクイーンズベリ公を苦々しく感じていた。ハミルトン公は母親に宛てた手紙の中で、「宮廷は私が代表貴族に選ばれないよう全力を注いでいます」と述べたあと、クイーンズベリ公が女王の名の下に多数派工作をしていると非難している^⑫。しかし、さすがのハミルトン派も、三派連合が維持されている限り、勝ちめは薄いと認めざるをえなかつた。ハミルトン公の配下の多くは代表貴族選挙をボイコットし、自らの所領に帰り下院議員選挙に力を注いでいたのである。

一七〇七年二月のスコットランド代表貴族選挙はスコットランド議会内で貴族の互選によって実施された。この選挙の手續については、きわめて僅かしか知られていない。公式の議事録は当選者の名前を記しているのみで、驚くべきことに当選議員の得票数さえ明らかではないのである^⑬。選挙はいわば「密室」で進められたといえよう。そしてこの方法はスコットランド内の合邦推進派の利害に沿つたものである。というのは合邦が現実のものとなるにつれて、スコットランド民衆の感情は反合邦に強く傾いていたからである。合邦推進の立場をとる三派連合は、民衆が暴徒化

して選挙の平穩な実施の妨げになることを何よりも警戒していた。選挙は混乱もなく終了し、結果は三派連合の大勝で、ハミルトン派は一議席もとれない完敗であった。三派連合の内訳は、アーガイル派二、スクアドロン派四で残りの一〇議席はクイーンズベリ直系か、公に近い人々によって占められたのである。

ゴドルフィン伯およびクイーンズベリ派はこの選挙結果にほぼ満足していた。しかし、スクアドロン派にとってはこの選挙結果は敗北に等しいものと映ったと考えられる。イングランド宮廷は官職叙任権パトロネージを活用し、スクアドロン派の懷柔に努めたが、スクアドロンはもはやゴトルフィンを信賴せず、ウィッグと提携することで自らの政治的影響力を強めようとしたのである。これについては次節においてさらに詳しく考察することしよう。

五 第二回代表貴族選挙

統一されたグレート・ブリテン議会は、上院一六名、下院四五名のスコットランド代表を新たに加え、一七〇七年一〇月に開会した。新議会とはいえ、下院議員の任期は、それまで存在したイングランド議会の残余の期間とされていたので、一七〇八年には総選挙が実施されるはずであった。総選挙を間近に控えた一七〇七年末から一七〇八年初頭の会期は政局の転換を予想される混沌としたものとなっていた。一七〇二年に内閣首班の地位についたゴドルフィン伯は対フランスとの戦争を遂行する以上、戦争の継続を支持するウィッグと提携する必要に迫られることになったのである。したがってゴドルフィン伯を中心とするトーリ穩健派は、一七〇七年から翌年の時点ではノチンガム伯らのトーリ右派と完全に訣別していたと考えられる。逆に野党の立場にあったウィッグは次第に政権を支える一翼を荷

なうことになった。ゴドルフィン内閣に協力を依頼されたウィッグは当然その「見返り」を要求したのである。本来ならば女王から官職叙任権パトロニージを与えられたゴドルフィンにしてみれば、ウィッグへの官職・年金などの給与は容易なはずであつた。

ところが女王アンはゴドルフィンがウィッグとりわけその最左派ジャントゥに恩典を与えることを頑なに拒んだのである。したがつて一七〇七年末から一七〇八年初頭の議会でゴドルフィン⑭は女王とウィッグの間の板挟みになった。そしてスコットランドをめぐる政治問題はゴドルフィン内閣を揺さぶる格好の材料としてウィッグ・ジャントゥに利用されたのである。合邦条約発効後もスコットランド内の政治・行政機関は、スコットランド人の民族感情を考慮してできる限り温存されることになっていた。しかしスコットランド内の行政機関を存続させることについては別の大きな目的が隠されていたのである。すなわち、これらの機関はいずれも多くの官職が伴っており、それらはとりもおさずクイーンズベリ公を中心とするスコットランド宮廷勢力の権力の源泉であつた。ウィッグはこれに眼をつけ、行政機関の統廃合をゴドルフィンに求めたのである。

ゴドルフィンがこの要求を拒否するのを見て、ウィッグはスコットランド内の冗員、冗官の廃止をよびかけるキャンペーンを議会で展開した。そして最初に檣玉に上つたのはスコットランド枢密院であつた。^⑮このときウィッグの先兵となつて枢密院廃止を主張したのがほかならぬスクアドロン派の貴族、すなわちモントローズ公、ロクスバラ公、トゥイデール侯、サザランド伯の四人であつた。前述のように一七〇七年二月の代表貴族選挙でクイーンズベリ派とスクアドロン派の關係はきわめて険悪になつており、枢密院問題で三派連合は破綻しクイーンズベリ派とアーガイル派の緩やかな同盟とスクアドロン派に分裂したのである。さらに驚くべきことにウィッグ・スクアドロン連合はトー

リ右派と議会内で無原則ともみえる提携關係を結ぶことになった。この提携はゴドルフィン政權を窮地に追い込もうとするウィッグとトーリ右派の意図がたまたま一致したことで実現したのであつて永續する性格のものではなかつた。しかしこの「無節操な同盟」は一七〇七年末から翌年の会期、そして一七〇八年六月の第二回スコットランド代表貴族選挙、そして一七〇八年末から翌九年の会期まで曲がりなりにも維持され、ゴドルフィン政權を悩ませたのである。

枢密院廢止問題は、ウィッグのみならずトーリ右派も廢止賛成に回つたことで、ゴドルフィン伯も全く打つ手を失つてしまつた。枢密院廢止案は一七〇八年二月可決し、ゴドルフィン伯は四ヶ月後に迫つたスコットランド代表貴族選挙を有利に進めるための足場の一つをなくしたのであつた。そして一七〇八年三月にはいま一つの大事件がおこつたのである。すなわち、ジェームズ二世の子ジェームズ・エドワード・スチュアート（「ジェームズ三世」と自称）がルイ一四世の援助を受け大艦隊を率いてスコットランド近海に在るとの情報がロンドンに伝わつたのであつた。このジャコバイトによるイギリス侵攻計画に対するイギリス政府の対応は迅速であつた。政府はただちに艦隊をスコットランド沖に急派すると同時にスコットランド内であつてからジャコバイトであるとの嫌疑をかけられていたものを次々に逮捕し身柄を拘束したのである。これら逮捕者については、スコットランド貴族も例外ではなかつた。従来から反政府的な言動をしていたハミルトン派の貴族の多くは逮捕され、裁判のためロンドンに送られたのである。

ただ、ここで留意しなければならないのは、ハミルトン公らが大逆罪の疑いでロンドンに送られたときには、ジャコバイトによる侵略の恐れはひとまず遠のいていたという事實である。イギリス艦隊が時をうつさずに急派され、スコットランド沿岸防備も固められたのを知つたフランス—ジャコバイトの艦隊は上陸を断念し、フランスへ戻つてい

った。したがってロンドンに集結したハミルトン派の貴族は大逆罪の被疑者から議会内の政争の具へとその性格を徐々に変えつつあったのである。

まずウィッグとトーリ右派の挾撃に苦しむゴドルフィン伯にとってハミルトン派の囚人たちは魅力ある存在であった。枢密院問題をめぐってスクアドロン派が完全にゴドルフィンから離反した以上、真近に迫った代表貴族選挙に勝利するための手駒はクイーンズベリー派とアーガイル派の二つである。しかしこの二派では強大なハミルトン派に對峙するのはむずかしかった。したがって今回の選挙では一転してハミルトン派をアーガイル派・クイーンズベリー派と結びつけ新三派連合を形成する案が浮上したのであった。一七〇八年四月、ゴドルフィン伯はダニエル・デフォを密使として留置中のハミルトン派貴族との交渉に当たったのである。^⑮そして遂に五月五日ハミルトン公は釈放の決定を受けたのだった。そして同月中旬には女王とゴドルフィン伯はハミルトン公をグレート・ブリテン王国の公爵位に叙するとの情報飛び交ったのである。^⑰

だが、結局このハミルトン公へのブリテン公爵位授与は実現をみなかった。この計画が失敗した理由については推測の域を出ない。ただ一つ確かなことは、最終的に叙爵するか否かの権限を握っていたのは、ゴドルフィン伯ではなくアン女王であったということである。名誉革命において種々の方法で国王大権が制限されるようになったが、それでもなお君主は一八世紀においても、誰を貴族とするか、誰をより上位に授爵するかについて専權的な力を保持していたのであった。そして、女王のハミルトン公およびその派閥への嫌悪は有名だったのである。ハミルトン派の多くは主教制支持者であり、その意味では国教会への篤信で有名な女王とは共通の利害をもっていたと考えられよう。しかし、一方女王はイングランドとスコットランドの平和的な合邦の実現を心から希望していたのである。したがって、

合邦交渉―批准の過程で執拗に反対を続けたハミルトン派に対し、女王は強い憎悪を抱いていた。

かくして一旦はゴドルフィン伯によって構想された、ハミルトン派・クイーンズベリ派・アーガイル派の第三派連合はついに目のみることなく終わった。そこでイングランド宮廷は一七〇八年の第二回代表貴族選挙ではクイーンズベリ派とアーガイル派の二派のみに頼らざるをえなくなったのである。一方、野党勢力としてはスクアドロン派がハミルトン派と結びつき、それをイングランドのウィッグが支持するという形をとった。そもそもスクアドロン派は親長老派のグループであり、ハミルトン派は主教制論者を中心としていた。だから、これら二派の提携は原理・原則を欠いた野合ということもできよう。こうしたスコットランド貴族の無原則ともみえる行動はかれらの経済的基盤が弱く、ゴドルフィン伯あるいはウィッグの官職叙任権パトロネージに頼ることなしには成り立たないことを示しているようにもみえる。だがスコットランド政治がいかに派閥の離合集散のみで動いているようでも、こうした行動規範を欠いた野合が長続きすることはありえなかったのである。

さて前述のように一七〇八年五月五日、ハミルトン公は大逆罪の疑いを晴らし釈放された。釈放実現のため最も力になったのはおそらくゴドルフィン伯であつたろう。しかし、ウィッグ後援の下、スクアドロン派・ハミルトン派の連合が形成された以上、ハミルトン公が自由の身になった恩義をゴドルフィンではなく、スクアドロン派とウィッグに対して感じたのは当然である。ハミルトン公釈放二日後の五月七日、ウィッグの指導者サンダランド伯は、スクアドロン派貴族の代表モントローズ公に次のような書簡を送っている^⑧。

この手紙が貴公の手に届く前に、貴公はハミルトン公が自由の身になったことを聞くであろう。実際この措置はき

わめて巧妙に実行されたので、必ずや一六名の貴族の選挙においては貴公やわれわれ全員が望むように事は運ぶであらう。私は次の事だけを言っておこう。スクアドロン派全員の名前が候補者リストの上に掲載されることを。そして貴公の成功はハミルトン公およびかれの友人にかかっているものであるから、貴公がハミルトン公とかれの友人を同じく信頼することを私はお願いしたいと思う。

こうしたスクアドロン派・ハミルトン派・ウィッグの密約が出来上っていたことを、クイーンズベリー派やゴドルフィン伯の側は気がつかなかったようである。ハミルトン公釈放の翌日、クイーンズベリーの側近マー伯は、「スクアドロン派が囚人たち〔ハミルトン派〕を籠絡することができなかったので私は喜んでゐる。このことで私達の選挙が容易になればよいと思っている。」と述べている。^⑨しかし、スクアドロン派・ハミルトン派・ウィッグの野党連合の結成が明らかになるにつれてクイーンズベリー派は選挙の見通しについて悲観的になっていったのである。クイーンズベリらスコットランド廷臣貴族に残された方策は限られていた。かれらが野党連合を圧倒するためには女王・ゴドルフィン・イングランド宮廷勢力の大半がなおクイーンズベリー派・アーガイル派のみを重用し、野党連合と対決する姿勢を示すことが必要だったのである。そして、スコットランド宮廷勢力の要請に応じゴドルフィン^{バトロネージ}はかれの官職叙任権をクイーンズベリー、アーガイル二派にのみ行使することを明らかにした。

さらにゴドルフィンはスコットランド代表貴族選にテコ入れするために、女王の貴族創家の大権を利用することでイングランド宮廷の意志をより明確に示そうとしたのである。すなわち、五月一八日、クイーンズベリー公は初のグレート・ブリテン王国の貴族としてドーヴァー公の爵位を授けられたのであった。しかし、この恩典についてはイン

グランド廷臣の間にさへ異論・反対があつたことは疑いえない。たとえば、マールバラ公はゴドルフィンの親友で政治的なパートナーであつたにもかかわらずこの叙爵に批判的であり、せいぜいスコットランド政局を安定化させるための「必要悪」と考えていたに過ぎない。²⁰ こうしたイングランド宮廷のクイーンズベリへの冷やかな態度は必ずしも驚くにはあたらないであろう。イングランド側は、スコットランド貴族がグレート・ブリテン爵位に続々と叙爵されることによつて遂には多数の世襲のスコットランド貴族が上院の議席を占めることを怖れたのであつた。

クイーンズベリへの恩典はイングランド廷臣の間からでさへ不満の声が上がつたのであるから、ましてや野党連合がこれを与党側からの「最後通牒」とみなしたことは無理もないことであつた。とくにウィッグの憤りは激しく、一七〇六年以来イングランド・スコットランド合邦とその安定化という共通目的のために紆余曲折を経ながらも維持されてきた友好関係はここで大きく揺らぐことになつたのである。以後のウィッグのイングランドの政局に対する立場は、これまでのようにゴドルフィン伯と「提携」するのではなく、実力によつてゴドルフィンを「屈従」させ、伯をおも形式的には内閣首班としながらも、実質的にはかれをカイライ化する道を選ぶことになる。たとえば、ウィッグは女王がクイーンズベリ公に対して叙爵することを実力で阻止しようとした。すなわちサンダランド伯らウィッグ指導層は、ウィッグ穏健派のニューカスル公（王璽尚書）を説得して、クイーンズベリに授爵するための勅許状に押印しないように求めたのである。²¹ しかし結局ゴドルフィン伯はウィッグにつけ入るすきを与えず、クイーンズベリ公はロンドンで勅許状を受け取つたのであつた。そして五月二八日、公は「国王代理」として代表貴族選挙を主宰すべくエジンバラに向けて出発したのである。²²

クイーンズベリ公を待ち受ける野党連合は当然種々の戦術を練つていた。まずかれらはクイーンズベリ公に与えら

れた爵位授与をゴドルフィン一派によつて作られた策謀とみなし、この爵位の無効を主張した。そして次の議會でもしも公がグレート・ブリテン世襲貴族として登院したならば、かれの資格について上院で争う姿勢を示したのであつた。²³次に野党連合は、さきの第一代表貴族選挙とは異なり、今回の第二回選挙では事前に周到に野党側リストを作成し、票の分散を防ごうとした。次に示した表の中にある野党側リストのうち1から7までは反合邦を標榜するハミルトン派およびこれに近い人々である。²⁴そして8から12まではスクアドロン派貴族、そして13から16までは必ずしも

与党側および野党側リスト

与党側リスト	野党側リスト
1. Dupplin	1. Annandale
2. Glasgow	2. Belhaven
3. Leven	3. Buchan
4. Loudoun	4. Dalhousie
5. Mar	5. Eglinton
6. Morton	6. Hamilton
7. Northesk	7. Orkney
8. Roseberry	8. Marchmont
9. Seafield	9. Montrose
10. Stair	10. Rothes
11. Wemys	11. Roxburghe
12. Lothian	12. Sutherland
13. Ilay	13. Crawford
14. Balmerino	14. Forfer
15. Blantyre	15. Glencairn
16. Bute	16. Ross

政治的立場が明確でない者からなっている。ハミルトン公に近い人々七名、スクアドロン派五名という数字は両勢力の規模を考えるとややスクアドロン派偏重のきらいがあるものの、ほぼ二勢力の力關係を示しているといえよう。

一方与党側リストでは1から11までがクイーンズベリ公を中心とした宮廷勢力、12と13はアーガイル派、14から16までは単に個人的な利害からクイーンズベリの側につき、リストに掲載された人々であつた。与野党それぞれの陣営はこれらのリストに基づき投票をするように支持者に対して呼びかけたのである。さらに、第一回選挙の場合とは異なり今回は「代理投票」(proxy)が認められていた。選挙に欠席する貴族は予め出席者に代理投票を依頼すること

ができたのである。欠席者は予め自らが選んだ代表貴族候補者の氏名を口頭または書面で代理投票の受取人に知らせるのが普通の方法と考えられていた。ところが、この選挙では過熱する選挙戦を反映して、与野党の指導者たちは欠席貴族に対し、代理投票を白紙で提出させ、のちそれぞれの陣営の首脳がリスト通りの名前を記載したのであった。こうした代理投票制度が、経済力の弱いスコットランド貴族によって用いられるとき、買収などの不法行為を招き、代表貴族選挙自体の正当性を疑わせることになったのである。

さて選挙戦は与野党の間で激しく争われたが、六月一七日の投票結果は与党宮廷側の勝利のうちに終了した。与党側リストの中では六名の落選があつたものの、中心勢力であるクイーンズベリ派、アーガイル派の大半は当選した。一方野党側は僅か六名が入つたにすぎない。それでもスクアドロン派はロクスバラ公、モントローズ公の二名が当選し、野党内の発言権の確保に成功したのに対し、ハミルトン派は公自身とオークニー伯の二名にとどまつたのであつた。しかもオークニー伯は上院における重要議題では与党側へまわるおそれがあつたのでハミルトン派の敗色は濃く、一七〇八年―翌九年の議会においてスクアドロン派とハミルトン派がふたび不和となる伏線となつていくのである。ハミルトン派の選挙結果についての不満は強く、かれらは代表貴族選挙において種々の不正があつたとしてスコットランド宮廷貴族および選挙管理委員を告発した。^②スコットランド内にはこの選挙訴訟を取り扱うべき裁判所はなく、この問題はグレート・ブリテン国内の最高裁判所である上院で一七〇八年末から翌九年にかけて審理が行われたのである。

六 おわりに

当時の上院では訴訟の審理は、政治的な問題と同じく聖俗両方の貴族の全員によつて決定されていた。したがつて法律実務に精通した特定の貴族が裁判に携わる慣行は一八世紀初頭にはまだほとんどみられなかったのである。そのために本来純粹の法律問題として係争されるべき訴訟でさえ、ウィッグ・トリー間の対立に巻きこまれて政治問題化する危険があつた。まして前節で論じたスコットランド代表貴族をめぐる選挙争訟が中立的な立場から審理されることは全く不可能なことであつたろう。したがつて、この訴訟を理解するためには、議会在開会した一七〇八年一月当時の政治状況を考察して始めて十分な分析ができるのである。

さきの第二回代表貴族選挙は、スコットランド野党勢力を支援してきたウィッグにとつて必ずしも満足のいく結果ではなかつた。しかしかれらはこの選挙について全く絶望したわけでもなかつたのである。というのは野党側の当選者の中にはウィッグの政治的立場に近いスクアドロン派の代表モントローズ、ロクスバラの両公爵が含まれていたからである。しかしウィッグはさらに大きな獲物を求めて行動を開始していた。ウィッグはゴドルフィン伯に強制してより多くの官職を分け与えることを要求していたのである。議会開会を目前に控えていたこともあり、ゴドルフィンはウィッグに大幅な譲歩を余儀なくさせられた。すなわちウィッグ左派ジャントウの指導者ソマーズ男爵とウォートン伯爵があいついで入閣を果たしたのであつた。しかしジャントウはなおもゴドルフィンの政治姿勢に満足せず、さらなる譲歩を求めたのである。そして、第二回代表貴族選挙をめぐる訴訟はウィッグがゴドルフィンを追いつめる格

好の材料となった。議會開会后、ウィックは、クイーンズベリ公がドーヴァー公として本人は世襲貴族として上院に議席をもつにもかかわらず代表貴族選挙で投票したことを違法として槍玉にあげ、公の投票無効を主張したのであった。これに対してゴドルフィンを中心とするイングランド廷臣グループはウィックの論に真向から反駁した。

廷臣らはクイーンズベリ公がグレート・ブリテン爵位をもつと同時に従前からのスコットランド爵位も併せ保持していることを強調し、クイーンズベリは選挙において投票権を有していたと主張したのである。ゴドルフィン伯はこうした論争を続けるかたわら、伯の官職叙任権を再び利用し、宮廷のクイーンズベリとその一派への信頼が変わらないことを明らかにしたのである。すなわち女王はクイーンズベリをスコットランド担当の國務大臣に任命し、スコットランド政治の最高責任者の地位を与えたのであった。これに激怒したウィック側は上院でクイーンズベリの投票の有効性について採決にかけることを要求し、僅差ながらも宮廷側をやぶり、公の投票無効を宣言したのであった。²⁶しかし宮廷対ウィックの抗争はこの採決によって一応の「手打」が図られることになる。つまり、イングランド宮廷はウィックおよびその配下スクアドロン派のメンバーに対して従来にも増して官職などを与える代わりにウィック側は代表貴族選挙をめぐる争訟の事実上の終結を決めたのである。そしてスクアドロン派はクイーンズベリのスコットランド政治における卓越した地位を認めたのであった。そしてほとんど何の政治的報酬も得ることなく放置されたのがハミルトン派だったのである。野党連合を組んでの選挙戦のあまりにも惨めな結末に絶望したハミルトン公は主教制度擁護者としてのかれ本来の政治的な信条にたち帰り、急速にトリーとの関係を深めていくことになる。

さて私達は一七〇六年のイングランド・スコットランドの合邦交渉から一七〇八―〇九年にわたる第二回代表貴族選挙とその選挙訴訟にいたる過程を考察してきた。そして、この過程でまず特徴的なことはスコットランドがその経

済的な脆弱さのゆえにイングランドへの政治的な従属を強めていったという事実である。それと同時に注目されるのはスコットランドはあらゆる面においてイングランドに屈服したのではないことである。もしもスコットランドにおいてハミルトン派が政治的に成功していれば、主教制教会が導入され、信仰面でのスコットランドの「イングランド化」がおし進められることになったであろう。しかし実際にはスクアドロン派、アーガイル派といった親長老派勢力が進出したことによつてクイーンズベリー派を軸として主教制主義者とそれを掣肘する長老派との力のバランスが生じ、結果的にスコットランド長老派教会はかううじて支配的な地位を保持したのである。そして様々な対立・抗争に悩みながらも二つの王国が無血で合邦を実現させ、それを平和的な手段で維持してきたことは現代に生きるわれわれにも示唆を与えているように思われる。

注

- ① National Library of Scotland, Wodrow Letters Quarto IV, f.177: J. Maxwell to [R. Wodrow], 23 Jan. 1707.
- ② SRO, GD 220/5/107/5: D. Nairn to [Montrose], 18 Jan. 1707.
- ③ W. Cobbett, *The Parliamentary History of England*, (1806), VI, 567.
- ④ Cobbett, VI, 565-66.
- ⑤ Cobbett, VI, 568; *Nicolson Diary*, 420.
- ⑥ National Library of Scotland, Dep 313/532 (Sutherland MSS.): Somers to Sutherland, 22 Jan. 1707.
- ⑦ [Historical] Manuscript] Commission], *Mar and Kellie MSS.* I, 368: Mar to D. Nairn, 1 Feb. 1707; *Ibid.*, I, 374: Mar to D. Nairn, 13 Feb. 1707.
- ⑧ SRO, GD 124/15/487/9: [Mar] to [D. Nairn], 6 Feb. 1707.

⑥ HMC, *Mar and Kellie MSS* 1, 375–76: Mar to D. Nairn, 13 Feb. 1707.

⑦ 参照。

⑧ 参⑤ 参⑥ *Correspondence of George Baillie of Jerviswood*, (Edinburgh, 1842), 188–89: G. Baillie to J. Johnstone, 13 Feb. 1707.

⑨ SRO, GD 406/1/7922: [Hamilton] to [Anne, Duchess of Hamilton], 14 Feb. 1707.

⑩ 非公定の複製集に於て A. Boyer, *History of the Reign of Queen Anne digested into Annals*, (1702–1713), V, 421 に収められてゐる。

⑪ 註釋に於て G. V. Bennett, “Robert Harley, the Godolphin Ministry and the Bishops’ Crisis of 1707”, *English Historical Review*, LXXXII, (1967), 726–46 参照。

⑫ *The Letters of Joseph Addison*, ed. by W. Graham (Oxford, 1941), 90: Addison to Manchester, 7 Feb. 1708.

⑬ *The Letters of Daniel Defoe*, ed. by G. H. Healey, (Oxford, 1955), 255–56: Defoe to Godolphin, 20 Apr. 1708.

⑭ *The Correspondence of Sir James Clavering*, ed. by H. T. Dickinson, (Gateshead, 1967), 3: A. Clavering to J. Clavering, 15 May 1708.

⑮ SRO, GD 220/5/172/1: Sunderland to [Montrose], 7 May 1708.

⑯ SRO, GD 124/15/754/23: Mar to Lord Grange, 6 May 1708.

⑰ *The Marlborough-Godolphin Correspondence*, ed. by H. L. Snyder, (Oxford, 1975), II, 991: Marlborough to Duchess of Marlborough, 24 May 1708.

⑱ British Library, Lansdowne MSS. 1236, f. 242: Sunderland to [Newcastle], 27 May 1708.

⑲ SRO, GD 158/1097/5: R. Pringle to [Marchmont], 1 June 1708.

⑳ 注㉔参照。

㉑ この選挙における与野党リストおよび各貴族の投票行動については The House of Lords Record Office, Main Papers, 2507 参照。

㉒ これら告発文書は現在上院史料室 (Main Papers, 2507) に保存されてゐる。

㉓ 裁決の結果はクイーンズベリ公の投票有効五〇票、無効五七票であつた。詳細については HMC, *Lords MSS* 1708–1710, 3

イングランド・スコットランド合邦にかんする考察（二）（松園）

参照。